

今こそやろう減災式

「自分たちの町は自分たちで守ろう」をスローガンに防災活動をしめようと、防災活動のスタートラインを誤って線引きしているところが全国には多いようです。



このスローガンの「自分たち」とは誰のことを指しているのでしょうか？この曖昧さが防災活動だけではなく、各種活動への参画意欲を削ぎ落としています。普段から挨拶や、会話をしている人達のことなら理解もできます。更に「友達の友達」「知り合いの知り合い」と輪が繋がりが広がっていく人達のことも含めて「自分たち」として解釈ができます。しかし「自分たち」と漠然と地域の人達全員を一括りに対象者として活動を担わせようというスローガンには、頭の中に疑問が湧いてきます。その疑問とは、①近所付き合いをしない②コミュニティ活動に参加しない③挨拶をしない④活動やイベントには批判的・否定的で、イベント開催中に「うるさい！」とクレームを付けてくる人達！そう・・・その人達の命や安全まで、なぜ私たちが守らなければならないのかと考えると、防災活動はもとより地域活動にも参加をする意欲が地域全体で薄らいでしまうのです。でもそれは一部のマナー違反者や町に住む作法を心得ていないごく少数のコミュニティ破壊者と呼ばれる人達の影響で、地域力が下がり脆弱なコミュニティへと誘引される結果を招くのです。

これは典型的な「定義無きスローガン」による弊害です。定義をしていないから、大義がないのです。当然、定義無きものには大義名分はありません。大義名分のない防災活動に、みんなで頑張ろうと掲げたとしても人は集まらないのです。

上記にある、コミュニティ破壊者を減らすためには、その人達にも理解できる定義を考えることです。定義を理解してもらうことができれば、コミュニティ破壊者を減らすことができ、地域力・防災力・防犯力をもアップすることが可能となっていきます。



では、防災に関しての定義を考えてみましょう。防災が目指すところの定義は「**自分の大切な人が死なない**」ことです。自分の大切な人を守り抜くには、自分も死んではいけないということです。「大切な人を守り抜く為に命懸けで！」これって生き残った側は、私を助ける為に私の大切な人の命が失われたと知った時、生き残った人は喜ぶのでしょうか？これは究極の自己満足以外の何ものでもないでしょう。

「**自分の大切な人が死なない**」この一見単純な言葉は、誰が考えても当たり前のことです。しかし、実際に理解されているかということ、あまりにも当たり前の

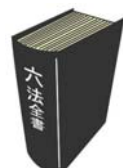
こと過ぎて見落とされていることが多いようです。

自分の大切な人を守り、お互いに守り合う作法こそが地域防災であり「コミュニティ活動」です。その地域コミュニティの中に「**防災・防犯・自治会・管理組合など**」の活動があるといえます。すべてが「**お互い様の作法**」で考えること、これが本当に大切なことです。

しかし、それらを見落としている人達（コミュニティ破壊者・無参加者など）は「**生きること・生き残れること**」が、**自分だけで対処でき完結すると勘違い**をしている人が多いのです。

1995年（平成7）阪神・淡路大震災では6434人が亡くなり、16年後の2011年（平成23）東日本大震災では死者・行方不明者が約2万人という犠牲者を出しました。「命を守る防災」が十分に理解されずに、本気で防災を考えていないことが露呈しました。にも関わらず、防災は「**自分たちの町は自分たちで守ろう**」などと**定義の無い漠然とした活動**を、日本の国を挙げて行っています。

あなたはご存知ですか？「**防災法**」ってどんなものか。防災法なんてものは、この日本にありません。1961年（昭和36）に制定された「災害対策基本法」、1998年（平成10）に「被災者生活再建支援法」など、ぼやけた法律から始まり、災害で生き残った人を対象とした法律が整備されています。阪神・淡路大震災以降、防災は飛躍的に進んだという人がいます。しかし「**備えの重要性**」「**命を守る定義**」は全くなされていないのが現在の日本の法律です。肝心要の「**人の命を守ること**」は、議論することすら忘れられているようです。



作法については、「**お互い様**」を勘違いさせている元凶がここにあります。それは自分が備えなくても、あれだけ大きな災害が襲って来れば「**誰か助けてくれる**」備蓄しなくても「**誰か分け与えてくれる**」自分がやらなくても「**ボランティアがしてくれる**」災害発生後に参加しても「**遅くは無い**」すべてが依存的防災（防災ではない）をしています。極端な言い方をすれば「**備えていた人も、備えていなかった人も同じように支援がもらえる**」という大きな勘違いから始まるのです。過去の災害では、備えていた人も備えていなかった人にも同様にボランティアがサポートし、同様に義援金も受け取ることができると、すべてのことを勘違いさせてしまっているのです。「**備えていた人と備えていなかった人**」には、大きな違いが生じていることが世に出てこない、報道もされないのです。なぜか？それは「**備えていた人の命が助かった割合**」です。典型的なものが、津波災害で「**まず逃げる**」を日頃から肝に銘じていた人が助かったのです。ここには「**地域や家族の信頼関係**」がありました。次号へ続く

